＜研究報告＞

# 初妊婦の妊娠の受容を促進する他者との関係性における経験

金谷掌子
岩手県立大学看護学部

## 要旨

本研究の目的は，初妊婦が営んでいる日常生活において，初妊婦の妊娠の受容を促進する他者との関係性における経験を明らかにすることである．

A 県 2 市町村在住の初妊婦 7 名に，半構成的面接法を行った．逐語録から質的・帰納的に分析を行った．初妊婦が営んでいる日常生活において，初妊婦の妊娠の受容を促進する他者との経験として，【全面的に支えられる経験】【赤ちゃんの存在を認められる経験】【妊婦として他者と新たな関係性を構築する経験】【他者との関係性を肯定的に捉え感謝をする経験】をしていた．これらの経験には，“他者から支えられる側面”と“他者から認められる側面”，“他者へ肯定的な感情を抱く側面”が含まれており，初妊婦の妊娠の受容を促進するのみならず，他者との関係性の再構築のサインとして捉えられることや母親役割取得過程に影響を及ぼすことが推察された．

**キーワード**：初妊婦，妊娠の受容，他者との関係性, 日常生活における経験

## はじめに

日本における年齢階級ごとの女性の労働力率において，「30～34 歳」の労働力率が下降する特有の M 字カーブは長年変わらない特徴であり，その理由は妊娠・出産・子育てをする時期に労働から離れるためと解釈されてきた．しかし，その M 字カーブの下降の程度について，平成 17 年と平成 27 年とで比較をするとなだらかになってきている（21 世紀職業財団，2015）．この変化は，妊娠・出産・子育てをする時期であっても仕事の継続を選択する女性が多くなっていることを反映していると捉えることができる．その背景として，女性の労働をサポートする母子保健法や男女雇用機会均等法，および育児・介護休業法など法的整備が進められてきたことが挙げられる．また，子どもを持つ前後での女性の職業キャリアにおける意識調査（厚生労働省雇用機会均等・児童家庭局，2010）において，子どもを持つ前よりもパーセンテージは低くなるものの「自分なりのペースで専門性を高めたい」「昇進や専門性の向上には興味がないが今の仕事を頑張りたい」と出産後も女性は仕事に対し前向きな姿勢を示している．このように，女性にとって就労することの意識そのものが定着していることも仕事を継続する一助になっていると考えられる．しかしながら，就労妊婦の妊娠期の快適性は非就労妊婦よりも有意に低いことが明らかになっており，妊婦自身を顧みるきっかけを提供し，妊婦を中心とした変化を実感できる関わりの重要性が示唆されている（小川他，2016）．就労妊婦は今後も増加していくと予測されることから，就労妊婦への支援の拡充が期待されている．

一方，妊娠期は予期的段階と言われており，妊婦は役割期待を学び模倣する時期である（Merecer, 1981）．そして，母親役割取得の過程が順調に発展するためには，妊娠期における妊娠の受容が重要であり（新道他，1997），女性自身が妊娠を受容することだけでなく，女性の生活空間の中に受け入れることが課題とされている（Reva Rubin, 1984/1997）．女性の生活空間には，女性を取り巻く他者が存在していることから他者に目を向けていくことが必要である．妊婦と他者との関係性に着目した研

究を概観すると，夫や実母など家族との関係性は胎児感情や母親役割取得に影響することが明らかになっている（岡山他，2006，岡山，2007，野原，2014，中島他，2015）．また，妊娠の受容にも夫・実母との関係が影響するとの報告もある（岡山，2002，植村他，2010）．就労妊婦が抱いている罪悪感の一つに妊娠によって職場に迷惑をかける行為（和田他，2016）が含まれていることから，就労妊婦にとっては同僚との関係性も妊娠の受容に影響すると推察される．このように，妊婦は他者の影響を受けながら自身の妊娠に向き合っていくことから，妊婦の日常生活における他者との関係性に焦点を当て，妊婦の妊娠の受容を促進する具体的な要因を明らかにすることは妊婦の支援の新たな一助になると考える．しかし，現段階での妊娠の受容に関する研究において，妊婦が営んでいる日常生活における具体的な経験に焦点を当てた研究は少なく，また就労妊婦に焦点を当てた研究は散見されるのみである．そのため，就労妊婦の妊娠の受容に関する他者との関係性を明らかにする前に，妊婦の日常生活場面に即した妊娠の受容に関する他者との関係性について明らかにする必要がある．

以上より，初妊婦を対象とした妊娠の受容に関する要因を明らかにするために，本研究は初妊婦が営んでいる日常生活において，妊娠の受容を促進する他者との関係性における経験を明らかにすることを目的とした．

## 目的

初妊婦が営んでいる日常生活において，妊娠の受容を促進する他者との関係性における経験について明らかにすることである．

## 対象の選定

経妊婦では妊娠の受容過程を経験していることから，純粋な他者との関係性の影響を抽出することが難しいと考える．そのため，今回の研究参加者は初妊婦とした．また，「他者」は，夫・実母・同僚とした．夫・実母は先行研究（岡山，2002．植村他，2010）から妊娠の受容に影響していること，同僚については，初妊婦が就労をしている場合，同僚との関係性が初妊婦の妊娠の受容に影響をすると推察されることから 3 者に限定をした．

## 用語の定義

流産経験や人工中絶経験を持つ女性が一定数いると推測されるため，本研究における『初妊婦』を初めて妊娠を継続している妊婦とした．また，『他者との関係性』とは，日常の生活場面における他者との言動や行動等の相互作用にて生ずる他者に対する感情および互いの役割を含んだ関係とした．

## 研究方法

### １．研究参加者

A 県 B 市，C 村に在住の初妊婦．

### ２．期間

平成 24 年 2 月～3 月．

### ３．方法

研究の同意が得られた市町村が開催する母親学級に研究者が出向き，研究の主旨説明を初妊婦に行った．研究の主旨に賛同を得た初妊婦と調査日程を調整した．調査をする場所は，研究者参加者と研究者が落ち着いて話しができるように個室とした．インタビューガイドを用いた半構成的面接調査を行い，原則，研究参加者 1 人につき 1 回の面接とした．面接内容は，了承を得て録音を行った．

### ４．内容

妊娠が判明した後の夫・実母・同僚に抱いている初妊婦の気持ちに関連した項目を設定した．また，初妊婦が認識している妊娠の受容に影響を与えた夫・実母・同僚との関係性については，岡山他（2006）が開発した Prenatal Self-Evaluation Questionnaire 日本語版の下位尺度＜妊娠の受容＞の項目を参考に，妊娠判明後に嬉しかった経験や妊娠を前向きに捉えることに影響をした経験について項目を設定した．

さらに，属性は妊娠週数，妊娠の希望，結婚後妊娠までの期間，流産経験および就業状態等について設定をした．

### ５．分析方法

分析対象は録音をした面接内容の逐語録である．逐語録を何度も読み返し，質問項目ごとに対する研究参加者の語りから，意味を成す文脈に切片化し，類似する意味の文脈ごとにカテゴリーに分類した．

表１　研究参加者の属性

| ケース(年齢) | 夫の年齢 | 妊娠週数 | 妊娠の希望 | 結婚後妊娠までの期間 | 流産経験 | 就業状態 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A (30) | 36 | 34週 | 有 | 9か月 | 無 | 有 |
| B (30) | 30 | 26週 | 有 | 7年 | 有 | 有（退職予定） |
| C (27) | 27 | 27週 | 有 | 1年9か月 | 無 | 有 |
| D (30) | 37 | 29週 | 有 | 8か月 | 有 | 有 |
| E (32) | 35 | 23週 | 有(計画外妊娠) | 結婚直後 | 無 | 有(初期に退職) |
| F (26) | 26 | 27週 | 有 | 4か月 | 無 | 無 |
| G (32) | 42 | 23週 | 有 | 結婚直後 | 無 | 無 |

表２　初妊婦と夫・実母・同僚との関係性における経験

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|---|---|
| 全面的に支えられる経験 | 妊婦の生活への歩み寄り<br>身体的・情緒的な生活上のサポート<br>仕事上のサポート |
| 赤ちゃんの存在を認められる経験 | 赤ちゃんの受け入れ<br>赤ちゃんの存在の共有 |
| 妊婦として他者と新たな関係性を構築する経験 | 夫婦から家族になる<br>妊娠・出産について教わる関係<br>より気軽に話せる関係<br>同僚への配慮 |
| 他者との関係性を肯定的に捉え感謝をする経験 | 夫の存在感の増大<br>実母に対する畏敬の念<br>サポート・配慮への感謝 |

看護学および心理学領域の研究者のスーパーバイズを受け，信頼性・妥当性の確保に努めた．

### ６．倫理的配慮

研究参加者へは，研究の参加は任意であること，途中辞退可能の保証，個人情報の守秘について伝えた．また，面接内容のデータの収集方法・保管方法および廃棄について，研究結果の公表について伝え，全てに同意をした初妊婦を参加者とした．

面接内容は，個人の経験を語り，その経験が妊娠の受容に影響しているものと考えられるため，その人の経験をありのまま受け入れることに注意を払った．また，体調への配慮も行った．なお，本研究は所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 55）．

## 結果

本研究では 7 名の初妊婦から協力が得られた．1 名が計画外妊娠であったが，7 名全員が出産することを決定していた．また，妊娠初期に退職をした者 1 名，今後退職を考えている者 1 名，今後も仕事を継続する者 3 名であった．妊娠判明時に無職の者が 2 名おり，同僚との関係性については，調査時に就労をしていた者 4 名から聞き取った（表 1）．

その結果，初妊婦の語りから，夫・実母・同僚との関係性における経験として，4 つのコアカテゴリーとそれを構成する 12 のサブカテゴリーが抽出された．初妊婦は夫や実母，同僚との関係性において，【全面的に支えられる経験】および【赤ちゃんの存在を認められる経験】，【妊婦として他者と新たな関係性を築く経験】をしていた．また，それらの経験を通して初妊婦自身が他者に対する思いとして，【他者との関係性を肯定的に捉え感謝をする経験】をしていた（表 2）．以下，具体的な経験として抽出されたコアカテゴリーについて，説明を記述する．なお，【　】はコアカテゴリー，『　』はサブカテゴリー，＜　＞はコード，「　」は初妊婦の語りを示す．また（　）内のアルファベットは各研究参加者を表す．

### １．【全面的に支えられる経験】

初妊婦達は，夫との関係性において「**一番変わっ**

たところは，早く帰ってくるようになったことかな(B)」と妊娠前よりも仕事を調整し＜夫婦で過ごす時間が増えた＞と語り，「妊娠前は“俺は疲れている”の一点張りだったんだけど，ご飯を作ってくれたり食器を洗ってくれるようになった（C)」，「自分ができることはやろうという姿勢になったような気がします（G)」と＜夫ができる家事の実践＞をするようになったと認識していた．そして，「イライラをぶつけてました．受け流してくれたから，ケンカにはならなかったので助かりました（F)」と妊娠に伴う生理的な情緒の不安定さを夫に支えられる場面について語るなど，夫からの＜情緒的なサポート＞を受けていた．

また，実母との関係性において，初妊婦全員が＜連絡や会う回数の増加＞を自覚していた．実母は＜妊婦の身体の配慮＞をしながら，実母自身の＜退職および勤務体制の変更＞を行い，妊婦である娘の生活のサポートを積極的に行っていた．そして，実母達は「ただただ張り切っている（C)」，「いくつも名前の候補を考えて，楽しんでいるみたい（D)」，「一緒に子どもの買い物をしに行くと，自分の頃とは違うって（E)」と＜娘と共に行う出産・育児への準備＞を楽しんでいると初妊婦達は認識していた．このように，初妊婦達は夫や実母の『妊婦の生活への歩み寄り』を感じながら『身体的・情緒的な生活上のサポート』を受ける経験をしていた．

同僚との関係性においては，「重いものは持つなとか，雪かきはしなくていいとか，過保護な感じにしてもらえることがなかなか嬉しかったです(B)」，「体調を気遣ってくれて，シフトを交換してもらったりしました（C)」，「先輩方が妊娠したときは自分がやっていましたが，先輩方からのサポートに感謝です（A)」と，＜妊婦である自分の体調への気遣い＞や＜出産経験のある同僚からの助け＞など，同僚から『仕事上のサポート』を受け，初めての妊娠生活と仕事を両立していた．

### 2．【赤ちゃんの存在を認められる経験】

初妊婦達は，「やっぱり（嬉しいことは)，（夫が）妊娠を素直に喜んでくれたことでしょうか（G)」「（実母が子どもを）生まれてくることを楽しみにしてくれていることが嬉しい（A)」等と，夫や実母が＜妊娠を喜んでくれたこと＞や＜赤ちゃんが生まれてくることを楽しみに待っていてくれること＞から，『赤ちゃんの受け入れ』をしてくれていることをとても嬉しく感じていた．夫との会話において，「赤ちゃんがいたら…って，今の生活に赤ちゃんがいた場合について言ってくれいていることが嬉しい(B)」と＜赤ちゃんに関する会話＞をすることを幸せと感じていた．

また，＜赤ちゃんに関する会話＞は同僚との間にもあり，初妊婦達は「赤ちゃんのことについて色々と話題が増えた（A)」と認識していた．これらのことから，初妊婦達は『赤ちゃんの存在の共有』を他者と行っていたことが明らかになった．

### 3．【妊婦として他者と新たな関係性を構築する経験】

初妊婦達は，夫との関係性において，「子どもは自分だけの子どもではなく，二人の子どもなんだと思った（D)」と夫婦二人の子どもであることを感じる経験をしていた．そして，「家族の絆みたいなものがうまれるような．（今までの）夫婦というのは，個人的な付き合いが多少あったかな．（中略）所帯じみたっていうんでしょうけど，それがかえって幸せな気持ちになるというか（B)」と，『夫婦から家族になる』と妊娠をしたことで生じる夫婦の関係性の変化を認識しており，そこに幸福感を抱いていた．

そして，「母親が妊娠した頃の話とか，子育ての話とか．今じゃなきゃ聞けないことだから思いだして話をしてくることが嬉しい（B)」，「自分の頃はこうだったって，色々とアドバイスを言ってくれる．経験者の言うことを聞くと，そうなんだって勉強になる（G)」と＜経験者としての語り＞を聞かせてもらえることに嬉しさを抱いていた．また，妊娠によって「先輩ママからアドバイスをもらうようになった（C)」と同僚との間にもこれまではなかった＜経験者としての語り＞を築く関係性になったと認識しており，妊娠・出産を経験している実母や同僚との間には『妊娠・出産について教わる関係』が築かれていた．そして，実母との間には妊娠をしたことによって「何でも気がるに話せるところが嬉しい（F)」と『より気軽に話せる関係』を同時に築く経験をしていた．

一方で，同僚との関係性においては，「結婚しても子どもがいない同僚がいるんですけど．不妊治療をしているって聞いたこともあって．はしゃいじゃ

いけないって，ブレーキをかけるんです（B)」と，＜同僚の未婚女性や子どもがいない既婚女性に対する気遣い＞をしていることや，「産休の代理で他の部署から回される同僚に対して申し訳ないと思います（A)」と，＜産休を取得することによる同僚への迷惑＞をかけてしまうという思い等，妊娠による『同僚への配慮』を新たに抱き，初妊婦が自身を律する関係性も築く経験もしていた．

### ４．【他者との関係性を肯定的に捉え感謝をする経験】

初妊婦達は，「健診のときは，いつも同行してくれるので心強いですね（A)」や「もともと依存していたんですけども，ますます頼る気持ちが強くなりましたね（D)」と＜夫の存在が心強い＞と感じ，＜夫を頼る気持ちの高まり＞が起こり，妊娠前とは異なった『夫の存在感の増大』を実感していた．

また，仕事を両立しながら妊娠・子育てをしていた実母に対して，「改めて母親は強いと思った(A)」や「母親がいなくて寂しいと思った思いがなくて．それがすごいことだなって，尊敬しています(D)」との思いなど，自身が妊娠をしたからこそ『実母に対する畏敬の念』を抱いていた．そして，夫や実母，同僚からの配慮やサポートに対し，『サポート・配慮への感謝』の気持ちを抱いていた．「祈るとか，感謝するとかそういう意味が前とは違う気がする．普通にあることに感謝できるというか(B)」と，妊娠をきっかけに感謝の意味合いがこれまでとは異なるとも語られた．

### ５．４つの経験から抽出された側面

初妊婦が営んでいる日常生活における他者との関係性における経験として，【全面的に支えられる経験】【赤ちゃんの存在を認められる経験】【妊婦として他者と新たな関係性を構築する経験】【他者との関係性を肯定的に捉え感謝をする経験】をしていた．これらの経験に含まれる側面として，【全面的に支えられる経験】から“他者から支えられる側面”，【赤ちゃんの存在を認められる経験】【妊婦として他者と新たな関係性を構築する経験】から“他者から認められる側面”が抽出された．また，初妊婦達は他者から【全面的に支えられる経験】をすることや【赤ちゃんの存在を認めれる経験】【妊婦として他者と新たな関係性を構築する経験】を通して，【他者との関係性を肯定的に捉え感謝をする経験】をしており，これらの経験から“他者へ肯定的な感情を抱く側面”が抽出された．

## 考察

### １．初妊婦が営んでいる日常生活上の他者との関係性における経験

“他者から支えられる側面”および“他者から認められる側面”，“他者へ肯定的な感情を抱く側面”が抽出された．以後，3 つの側面の意義を中心に考察をしていく．

１）他者から支えられる側面の意義

女性のメンタルヘルスに影響する数多くのライフイベンツの中で，妊娠が及ぼす影響は中低度であり統制可能とされている（北村，2007）が，個人の人生における 1 つの転換期であることから危険な機会にもなり得る（M. H. Klaus, et al. 1995/2001）との指摘もある．それほどに，妊娠による喪失体験（新道他，1997）や身体的な変化，今まで行ってきた家事や仕事が思うようにできなくなる不全感，これまでと異なった他者との関係性の再構築等の経験から受けるストレスが大きいと推察される．就労妊婦を対象とした調査では，妊娠初期は家庭役割と仕事役割の両立，妊娠による体調不良によって仕事の継続が困難と感じた際の葛藤が有意に高いとの報告もある（三好他，2012）．しかし，妊婦は人間関係や子育ての不安，仕事との両立などへの悩みを夫や同僚に気づいて欲しいと思いながら相談できないことも明らかになっている（工藤，2010）．そのような状況の中，他者から妊婦の体調を気遣われることや身体的・情緒的なサポートを受ける経験は，妊婦のストレスが低減され，妊娠による心身の変化や環境の変化に適応していく助けになっていると考えられる．

一般に，人間は他者に適度に依存することによって自立心が養われる（福島，1993）ことが報告されており，これは母親との関係性においても認められている（岡山，2016）．夫や同僚との関係性においては明らかになっていないが，妊娠期において他者から全面的に支えられる経験は，いずれ母親として自立をしていかなければならない初妊婦にとって，母親としてのアイデンティティを確立していく母親役割取得過程においても意義が大きいと考えられる．

２）他者から認められる側面の意義

初妊婦達が経験をしていた【妊婦として他者と新たな関係性を構築する経験】は妊婦として認められる経験であり，【赤ちゃんの存在を認められる経験】と共に他者から妊娠を認められることが根幹にある経験と推察される．これまでに初妊婦は実母からの肯定的な承認によって，自身の妊娠に価値を見出すことが明らかになっている（岡山，2007）．初妊婦にとって，他者から妊娠を認めらえることが初妊婦の妊娠の受容の一助となっていると解釈できる．

その背景として，現代社会では少子化や地域コミュニティの希薄さにより，女性の妊娠・出産に伴う女性の心理的変化や日常生活におけるふるまい等を垣間見る機会もない．そのため，妊娠・出産は個人的なものとして捉えられている．この点においては，分娩が主として施設で取り扱われるようになったことで家族や地域の人間関係から切り離されたとの一つの分析がある（船橋，1994）．これらから，初妊婦は自身の妊娠を他者にどのように伝えたらいいのか，また，他者がどのような反応を示すのかに不安を抱いていると推察される．そのため，初妊婦は他者から胎児の存在や自身を妊婦として肯定的に認めてもらうことで，他者に抱いていた不安が安心へと変わり，他者との関係性を通して自身の妊娠に向き合うことができると考える．

３）他者へ肯定的な感情を抱く側面の意義

初妊婦達は，他者からサポートを受ける経験をきっかけに，他者との関係性を肯定的に捉えていた．実母との関係性に着目した研究において実母を肯定的に捉える要素は，これまでの否定的感情をゆるめる要素も含まれており，肯定的感情を高めることによって，母親との関係性を客観的にとらえ，両者の関係性の再構築へつながると考えられている（岡山，2016）．その点から，他者へ肯定的感情を抱く側面は，他者との関係性の再構築を歩み始めているサインと捉えることができるのではないだろうか．

一般的に初妊婦の最も身近な母親のモデルは実母である．また，初妊婦達は，実母と同様に同僚との関係性においても『妊娠・出産を教わる関係』を築いていたことから，初妊婦にとって同僚は「妊娠と仕事」または「育児と仕事」を両立している母親のモデルと認識されていたと推察される．モデルとなる実母や同僚と妊娠という共通体験を通し，実母や同僚が妊娠・出産・子育てをしてきたまたは子育てをしている側面を改めて捉えなおす機会となり，感謝の気持ちだけでなく尊敬の気持ちも高まり肯定的感情を抱いたと考える．

一方，実母や同僚は母親としてのモデルであったのに対し，夫とは新たな夫婦関係を構築し共に歩んでいく存在である．妊娠期は新婚期に含まれ，夫婦としての相互の理解を深める時期である（鈴木他，2011）．特に，妊娠は夫婦に共通の目標をもたらし，夫婦の情緒的関係を築く重要な機会であり，出産育児の会話が夫婦の情緒的関係に影響をしている（渡辺，2014）．今回の調査においても，日常生活において夫と<赤ちゃんに関する会話>をすることや妊娠前よりも<夫婦で過ごす時間が増えた>こと，加えて<情緒的なサポート>を受けることで，夫への肯定的感情が高まったと推察される．

### ２．本研究からの看護への示唆

初妊婦が営んでいる日常生活において，妊娠の受容を促進する他者との関係性における経験が明らかになった．これらは，初妊婦の妊娠の受容を促進することだけでなく，他者との関係性の再構築過程のサインとして捉えられることや今後の母親役割取得過程に影響を及ぼすと推察された．よって，妊娠期に初妊婦と他者との関係性について注目をし，日常生活場面に視点をおいて関わることは，初妊婦と他者との関係性の再構築の現状や母親役割取得過程への影響を検討する情報が収集できると考える．これらは長期の関わりを経て初妊婦と共有できる情報であると考えるため，継続的に関わることのできる外来看護の場面で把握することが適切だと考える．分娩施設の集約化によって妊婦が一施設に集中するだけでなく社会的ハイリスク妊婦が多くなっている中で，身体的・社会的に健康な妊婦に時間を割くことは大変なことである．しかし，妊娠期に他者との関係性について保健指導等で触れることは，初妊婦の妊娠の受容の促進支援，他者との関係性の再構築の支援につながる他，ひいては，他者の協力・支援が必要になる産後に，スムーズに他者から協力・支援を受けられる環境づくりの一助になると考える．

## 結論

初妊婦が営んでいる日常生活において，初妊婦が妊娠の受容を促進する他者との関係性における経験として，【全面的に支えられる経験】【赤ちゃんの存

在を認めらえる経験】【妊婦として他者と新たな関係を構築する経験】【他者との関係性を肯定的に捉え感謝をする経験】をしていることが明らかになった．また，これらの経験は“他者から支えられる側面”と“他者から認められる側面”，“他者へ肯定的な感情を抱く側面”が含まれ，それらは初妊婦の妊娠の受容を促進するのみならず，他者との関係性の再構築過程にあるサインであることや母親役割取得過程に影響を及ぼすことが推察された．また，看護職者が妊娠期に初妊婦の他者との関係性について触れることは，今後、初妊婦が他者から協力・支援をスムーズに受けるための環境づくりの一助になると示唆された．

## 謝辞

本研究にご協力いただきました初妊婦の皆様，市町村関係者の皆様，病院・診療所の関係者の皆様に深く感謝申し上げます．なお，本研究は岩手県立大学社会福祉学研究科修士論文の一部に加筆修正を行い，第 56 回日本母性衛生学会で発表した．

## 文献

母子保健事業団（2010）：母子保健の主なる統計 平成 22 年度発刊，東京．

福島朋子（1993）：自立に関する概念的考察―青年・成人及び女性を中心として―，発達研究，9，73-85，1993．

船橋惠子（1994）：赤ちゃんを産むということ　社会学からのこころみ，64-74，日本放送出版協会，東京．

北村俊則編（2007）：事例で読み解く　周産期メンタルヘルスケアの理論　産後うつ病発症メカニズムの理解のために，医学書院，50-58，東京．

厚生労働省雇用機会均等・児童家庭局（2010）：平成 23 年版勤労女性の実情．http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/11.html［検索日 2012 年 6 月 20 日］

厚生労働省（2010）：厚生労働白書（平成 22 年度版），175-177．

工藤優子（2010）：妊娠初期の抑うつ状態の妊婦の心理状態に関する一考察，母性衛生，51（1）．127-136．

Marshall H. Klaus, Johe H. Kennell, Phyllis H Klaus（1995/竹内徹 2001）．親と子のきずなはどうつくられるか，医学書院，1-26，東京．

Mercer, R. T. A theoretical framework for studying factors that impact on the maternal role（1981）. : Nursing Research，30，73-77．

三好美映子，内藤直子，佐々木睦子（2016）：ワーク・ファミリー・コンフリクト（WFC）尺度日本語版を用いた就労妊婦の WFC6 次元モデルの特徴，香川大学看護学雑誌，16（1），1-6．

中島久美子，早川有子，常盤洋子（2015）：妊娠期の妻が満足と感じる夫の関わりに影響する要因の検討，母性衛生，55（4），668-676．

21 世紀職業財団（2015）：女性労働の分析男女雇用機会均等法成立 30 周年特集，21 世紀職業財団法人出版社，東京．

日本婦人団体連合会（2010）：女性白書，はるぷ出版，東京．

野原真理（2014）：妊産婦の育児・健康状態および親族によるサポートの影響，小児保健研究，73（1），10-20．

小川彩，中村康香，跡上富美，他（2015）：就労妊婦における妊娠期の快適性の特徴，母性衛生，56（2），292-300．

岡山久代（2002）妊婦の胎児への愛着に対する実母ならびに夫との関係の影響，日本看護研究学会誌，25（5），15-25．

岡山久代（2007）：初妊婦がとらえる実母との関係性の主観的体験―妊娠中の実母からの影響および実母との関係性の形成・変化―，滋賀母性衛生学会誌，7，39-47．

岡山久代（2016）：初妊婦と実母との関係性モデルの検証，日本周産期メンタルヘルス学会学会誌，2（1），67-71．

岡山久代，高橋真理（2002）：日本語版 Prenatal Self-Evaluation Questionnaire の開発，日本女性心身医学会雑誌，7（1），55-63．

岡山久代，高橋真理（2006）：妊娠期における初妊婦と実母の発達的変化，母性衛生，47（2），455-463．

Reva Rubin. Maternal Identity and the Maternal Experience（1984/新道幸恵，後藤桂子 1997）：母性論母性の主観的体験，62-68，医学書院，東京．

新道幸恵，和田サヨ子（1997）：母性の心理社会的側面と看護ケア，第 1 版，87-115，医学書院，東京．

鈴木和子，渡辺裕子（2011）：家族看護学－理論と実践，第 3 版，48-52，日本看護協会出版会，東京.
植村裕子，榮玲子，松村惠子（2010）：妊娠初期の女性における妊娠の受容に関する研究，香川県立保健医療大学雑誌，第 1 巻，35-41.
和田彩，中村康香，跡上富美，他（2016）：就労妊婦の罪悪感：概念分析，日本看護科学会誌，36 巻，213-219.
渡辺由加利（2014）：妊娠末期にある夫婦の「情緒的関係」に影響を与える要因，札幌市立大学研究論文集，8（1），31-38.

（2018 年 4 月 13 日受付，2018 年 6 月 13 日受理）

<Research Report>

# Experiences in Relationships with Others that Promote Acceptance of Pregnancy by Primigravidae

Shoko Kaneya
Iwate Prefectural University，Faculty of Nursing

**Keywords**: primigravidae，acceptance of pregnancy，relationship with others，experience in daily life